

# 被災された方々が次のステップに進むため、今私たちにできること

みえ災害ボランティア支援センター 2013年度に向けて

東日本大震災支援のためにみえ災害ボランティア支援センターが設置されて2年になります。私たちが2年間寄り添い続けた山田町は、被災した小学校の建て替えや復興住宅建築用地の整備がやっと始まるかといった状況で、多くの方々が生活し幸せを感じていた街並みは今も更地のまま、多くの商店も仮設営業、漁業関係も震災前の活気を取り戻すことができるのかといった危機感の中で懸命の取り組みをされています。仮設団地では先の見えない避難生活が続き、地域の鉄道は復旧の目処すらなく、復旧途上の道を通う学生たちも不便な通学生生活をすごしています。



また、公的に把握されているだけでも500名の方が三重県内に避難されており、地元と三重の二重生活や震災のストレス等のために今でも多くの課題を抱えて生活しています。

当センターは、ともかく目に見える形で支え合う手を差し出すために現地に長期滞在して支援を行った1年目、仮設暮らし・一時避難の暮らしの中で仲間づくりが進むよう寄り添う活動を行った2年目の経験を踏まえ、3年目に入る山田町のみなさん、そして三重に避難しているみなさんと取り組む次のステップで大切なのは『当事者主体』『持続可能な活動』そして『教訓の伝承』だと考えています。

山田町のみなさんも、一時避難されているみなさんも、いずれは今の仮住まいを離れ、本当に腰を落ち着ける住まいに入る日がきます。喜ばしい次の一歩なのですが、しかしその時再び今の仮住まいで得られたご近所友達やコミュニティとの別れを経験しなければなりません。そして、本当の住まいで再度ご近所友達やコミュニティを作る、という努力を強いられるでしょう。

しかも、次の引っ越しは地域のみんながほぼ同時に経験するのではなく、復旧・復興の過程で一人ひとりバラバラに経験することになります。そんな近未来の課題を見据えると、『当事者自らが活動の主体となり』『継続可能な身の丈に合った取り組みを息長く続けること』が大切になると考えます。支援センターでは、山田町、そして三重に避難しているみなさんが自ら取り組もうとする気持ちをもてるように、そんな仲間が手を取り合えるように応援して行きたいと考えています。

また、東日本大震災で被災した方々の悲しみを癒すもうひとつの視点は『災害の教訓をそれぞれが伝承していくこと』だと思っています。これこそが「東日本大震災で被災した方々を忘れない」という言葉の本質であり私たち三重県民が取り組むべき大切な事業です。その為に、東日本大震災で活動したボランティアのみなさんお一人おひとりが、その活動で得た学びをぜひ共有・発信して今後につなげて行けるよう取り組んで頂きたいと考えています。

みえ災害ボランティア支援センターでは、次のステップを見据えた『当事者主体』『持続可能な活動』『教訓の伝承』をキーワードに、2013年9月にある山田祭迄をひとつの目標にボラパック活動を続けると共に、12月末迄を目処に震災からの教訓を整理し三重県内で伝承していく取り組みを行う予定です。これらの活動を踏まえながら、息の長いささえあいの取組へと継続する形を模索していきます。

センターの活動は多くのみなさまのご支援が活動の原動力となっています。2013年度もみなさんご参加・ご協力をよろしくお願い致します。

平成25年2月19日  
みえ災害ボランティア支援センター  
センター長 山本康史